三世乃光

一

182.85
Ko518m

国立国会図書館　タイトル『三世の光』 請求記号 182.85-Ko518m

ガラス使用

182.85
Ko518m

大会哉薄伽梵法身虚應無
相寂殆妙色無為業用自在
稱贊不可思議不可及至
于垂迹印度降誕釋種行於
四門而見老病死槎於高室
而觀察無常潛踰城出家赴

国立国会図書館蔵書

国立国会
25.3.31
図書館

112253

国立国会図書館　タイトル『三世の光』　請求記号 182.85-Ko518m　ガラス使用

耕競伽脱瓔珞〻〻寶衣着簾
聲之法服苦行精進剃波刻
骨竟坐金剛坐上摧纏蓋之
山在菩提樹下語得薩波若
四八大人之相勝妙殊絶八
十隨形〻〻好映徹照曜其威

儀儀然圓滿無方非言思之
所及也於此時也一切〻佛
法一時顯現魏〻乎蕩〻乎
轉法輪於三千現分身於百
億勿梵王諸天来降受化千
生四輩投帰語果雨雜華於

七處説阿含お祇林三学二
本普蒙滋潤六道四生共到
彼岸加之方等般若之場聯
駕於羊鹿牛靈鷲娑羅之會
俱渉於象馬兎示衣裏之妙
珠而再金剛之寶蔵可謂化

孫頓書能事已畢矣於是人
云失望世界空虚傳燈存質
弘道在人故提河波静之新
無滅勸問終之議繁策挽回
梅檀薪盡之夕波自惑欽喜
之心遣喉殷勤畢鉢珠座翳

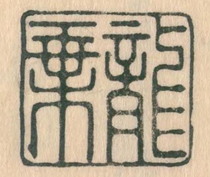
国立国会図書館　タイトル『三世の光』　請求記号 182.85-Ko518m
ガラス使用

鑁兮唱故結集雖分内外三
藏雖異有其俱是金口親詮
醇乎薩達磨也自爾以來多
歷年所世降時移龍象逞宗
我則一華之芽開論師馳名
相則頓悟漸修之教分徒誦

契猩睚睞毘尼空論鈔疏不
修實行求解者衆多我行者
多少不尋八雲之雲塔不知
八相之化儀正法之命脉於
是乎幾將殞絶嗚呼可不悲
哉皓月比丘尼研精積思有

年於茲據乃都破僧事及与
釈迦譜等纂集化儀之大綱
解以國字以導顯蒙可謂勒
矣有信乎事女邪公諸世以
其利益句序於余々随喜々
餘題迹云于巻尤如是

文政十三年庚寅初秋
住洛西三宮寺苾芻乙雲
誌乗敬撰



國立國會圖書館藏

三世の光此序

世間はめに見ん海をの多くれと月日此にはかはる事
めてなきはなし天地のあるさに生をしいまゆ
も乃ちくらなまとふうまひなくこのしふもよろこぬ
色をこれあまつめくみのほうなるんやそれなたらぬ
たせなへる此日本のなまへ和いきすなくきれみと
此御はかそ海をたくひなくなりはしまはさるなる
書のそれは覚えてたしといへども面をあはさ志はこ
私をもみちく海にしといへども風をさらなて散ゆく

序ノ五

めまいたんやちかなかたをなかぬまハあれさたな
あるみくなりとてハこひすつるかし人のうへもう
まにことなくて心ゆ所なよりほしはそ一まい乃
蔓此旨にしき老乃彼ふるひの後らさまきまり
されとこそつゆなき世のなこんまてよれとも
なをやさなまし さふまそなくてこつらあやさら
ゆまを於とろふるも此多かめなそやまとはりなく
志ゆもたれからすやさなか中にも世まなくなかす
堂ふとゆまし人の利益をも得福祿とも なる程

序ノ六

きもれく毛てそこなれそなくなるかりなんとふ
かるしともなしかまたなりてや法雅の中まとりせ
ゆふ醍醐といふも乃ハ天竺の山中にくあはこ
此年月をうさして仏をいて味にあるつら此旨ま
ゆくこれなく是をなむるも乃もろく此ゆくなを呼
れたのしこれのうちはなさしれそそ乃あそこむたぬ
とくなこくさん人のもとめうなこと安からは是を
なきなふも此山すてうけるなると起ハまことにまし里
なき醍醐まそそ此味にも功能もうれたれるを

このあき人利をこんんかなめにすこしくれをくゝ
ましふ法に次にうる人もまたれをくゝふ又そ乃
次もくさへくてかくしゆく人を雑りをとりさぬるなを
小路にくさ里れとなりて色との醍醐の事は
いとゝ鈔里すくなくあらぬ味ひとなりたそぬめり
されと世の人そなほ醍醐なれはひ是をとらふ
とひもちふ事ハかなりてその妻にあてられ這
こゝ鈔こゝ世尊 聚法もこれにおなしとうせのふ世
尊れ金口より里とうせのふハまことにこ世諸佛乃

正法なれそれみの里をほさつ羅漢の鈔とうせのふ
そなほ正法なれそれより里つゝ屋ハくて凡夫僧より
うつれ聚宮多くまし屋てとけそ名は佛法なほ
此も語らぬ凡夫の法になりてこれを信手法もれ
これ邪語にいれとうけ為まへ今末法の中
宗旨まちゝにわかれ其のくまろよる所に人をこちら
ひくされとそ乃祖師ハはその心得なまふら見を
来ふ所より里てハこれあらぬこれ里になりゆきハこれ
を伝表法ものハおもたすなほ法なに心き入まらせ

不信の人ハ世間ハこちに毛おとれ里をうとみいやしむ
自他共に法をひいりハかわりや佛日たやくむかを
幸さめ人を住持ハ三宝ハ人乃護持あわてなむ
我里おたしてハ是にすわて佛像をも弦まうつし
本ハ起さん世の人物信し佛宝をあふ者を流
され世世ハ世ハ法の中ハ護法の功徳すく
れ里を此ハせたまふをうみのゆを出る人ハ三ほとけ乃
路をあふさつしみ出わてふこ遣はらんことを
これ称ハ今所にさらんやそ毛く今世の中ハ石を

序ノ八

もて法くわ木を毛てもきはむ五里ん塔婆を
地名火風空ハするまて大日如来の御功徳そな
ハ里おはしませはまことにかたわ志ハ遠ぬ功徳
聚まてめにをうみ身にぬるも此無量劫の罪速ハ
滅し福慧を増とそうけたまハ家さ海にあらく
しき木まてたらなけにつくわるる寒毒に多ふ遠
よこたる里面にうたまつらくれまけ通なるハちのく
たまふ面ちよわかこう海してきふまんとのけらハう
うと海しき心ちす海そむるにもあまわにのみ人

きゝ給わこれ塔婆のうへにおもむよそへらるゝ今の世
此生家のさ海よ来乃世までも人天の福田に於てく
と見重せゐふ僧宝此なかれともゆえ先世の人まことに
いとはなかゝ多くなりてゝるなんせむすなるき花
のまちるハ免てたしといへども天人すなかきなかめ
五輪此るゝちハけうかしといへども此ゆるき現当
二世の利益おしたる流へし今かくす清の世となれて
出家此源たらたれども僧宝をおもふ本をこゝふかく
うやまひ多かるむの人ゆゑ解説の福縁むるしかんや

さ海るゝふ志し深かゆゑ葉山蓬文沙弥尼今世に
をてあいふ釈迦ハ相記といふふみをひてうちふこ
をるんる人乃まちいとおもハんとをのなしみこ蔵乃
説もるゝてハ相の縁をるきおさむの志をおこ
ちましふいのらみしかくてそ乃所をはるまれ此ゆゑ
も今そ五十年たりわ此昔ゆるんまれわきよ望
この此所をつむの志そあわなからいそはらて
明し蓄せしに罷陳ふるゝ多病ちる流身此今六十
年にはこれるまてよそ花のなかれこまるハ毛し

112253

国立国会図書館　タイトル『三世の光』 請求記号 182.85-Ko518m　ガラス使用

三宝の加護あるまでむかしの聖そんことをゆるさせ
たまふまやとふるゆゑひおもんぬ起してオ此つるなほを
もふそ乃みしきをもわまれかたしけるくも釈氏の
は見世尊ハ相成道乃こゝあとをうれあつめんと
にかくいふまで文化十とせ何まわなるまゝあり

序千

三世の光このゆ巻此一

むかし釈尊世におはしゆしときに釋種の君何まこおちしまに
みなり乃國此大きこの御すぢなりあほと紀集會おはしゆして
此さまふこの釋氏は劫初よりつゝハまゆとハ空ど天地ひらけちぼ
望てよりゆ今までそのゆぎく此ことハ誰もおぼろけなりきゝでなる
なきことなるにいざうちゆれ御うでく世尊に問まらんとおこの
らひなるゆゑ御もとにまうで御何しを礼し其志願我ゆしたまふ
世尊もよ此中の人乃てろげりひとなるハ世なひ此釋種の多ぐひ
なく貴くおはしまに事を御みげりし説せ給ちんとゆハとをやうしも
御背此痛せなへ御にことよせて目連尊者にゆげ里説せなひ御こゝげ

ゐらハ右の脇をゆかふ法を御手枕して如法に卧せるふ爲者佛勅を
うを高座にのぼ里なるへば秋子みなすこえて御あしを礼しをハり坐
しなふ目連爲者御めをとぢ憶念しなひやがて此賢劫ゑらけし
はじめより此とを説をなふそもく此世界もとは大虚空なりその
こゝろの中にもじめて雲おこり風こちていと此たゝる面のふふことは
里其面風のちゝらにてこりむすぼれたほかはじ先て土と如ほ
其土色香そなりり味ひ甘露乃ごとく醍醐のことしやうしく法
ちなりたほぞかりにて海山もなく春秋夜昼のわかちもなく
幾ばく憶万年此何ひぞたゞかうしくとしてすきもてゆく其後光
音天より降里なふ毛化生にて身に光明なり壽命ぎりなく

巻一之一

そらを飛行し楽みすめり御ぞ月日星もなられバらるゐひ御もな
く君臣父子男女貴賤此わかちも如くくひものも病もなし名
字種族もなしたゞひ薩埵ことよぶこの世界にはじ先ゐ
有情此何らハれしすがこなりなふもれらしかしといふ事も志らぬ
して又無量歳すめり其なかにひとりの人何里指をもて大地に
ふきてそれをなめかの類ひなき味ひ此あほ事を志ふ見えひ毛
此はし先ゐり世乃中よりらぬことハうつ里やはく見にならひて多
く此人ちをなめられバ其なむほまくに身わもくこのたくなりてうちも
おとりゆき光明も何里しやうにあきらかならぬ其中に毛多く
なめすくなくなむるそ乃をちめ志ほくすがこ形なども御ほ

里にまゐバ又是によりてはじめて家他彼此の心を起しこれはおと
まゐ家は僕れ里とおもひこれおとれ家は何れどの家まされ
家にほこ家心々の家まゐば國土もきこの家ならひ事今まで大地一や
う社醍醐味なるまゝが其にぢいひなくなりて多くはあらしとな
まる里此時薩埵あゆまゐてこれをうまへなげき昔をしたひ善
味ぬこひ今家是愁歎社はじ免なる里大地乃甘露味ハ変じて
大こうこほちとなる里ハ今れど底生の福業社ちからゆきざれは
其土社間に地膚といふその所まる里又地鍮ともいふ其いろは
金乃善のごとく味ひは密社ごとしこれをくひも社事無量衆
るもてゆきぬ是も又ほきにあらしかかれくひそのく多女にてかゝ

りこちもちきにしたあり智恵もおとり僕里出来ぬまはとに
かへに自他情慢の心まほ家さまば終にこの乃地膚もゆきて大地
みな去ばかりになる里ぬむりしハ其露味ゆきて薩埵よきのな
善味とたゞ一云いひしにこのたびハ地膚社なきをこのなしみう
まへ乃詞もりさなりてこほしきこのなくといひて悲しみにへ家
ほどに林に林茂といふこ乃みなりぬるこれうほハしきこと花のこと
く味ひは新熟社密乃ごとしこれを含して無量衆をゆく
其うちに家他彼此の心もまほりゆく林茂も又なるほなるぬ諸
人これをうらみかなしむにまゐ里に汝家まへをもなれよ汝家
まへをもなまよといふ又其時地上にもじめてたへなほ稲お

ひ出ぬうゑずしておれがうゝ生ず糠も毛みもなく長ち四指ぞ
この里にあり（四指とハ唐尺の二寸斗）且つのれバ蒿に生ずくれにかまゝバあしきにお
ひいづ時れ人にあいまゝとなりて含ふ此米をもちふ所に時になりて
身れ光明をうしなひ世間ぬむ玉乃やみとなまゝり与れ中是を
このなしめ所に有情の福力ふしぎにて東方に日輪にあらはれぬ
是を諸人めでよろこび蘇利耶ことといふ（そのゝやハ天竺れことばにて日輪乃ことなり）此時
月星もはゞ免てにあらはれ所日いづまバ人あいまゝよろこび日いれ
バにあいまゝてかなしむ是より晝夜ひかれ年月時苔も次第に
わの所よりひ所あれぞ世間に明暗いでき時に陰陽寒暑ハ
だまるこれ天地のくなりゆきバ人もやうく心乃うちに事れ善悪

巻一之三

そのよしにあしを志ぬ是飛ぶ矢をわかち志所やうになりぬれ
ばの所好稲もにらくしうなりて毛みゆもいできぬ合物あら
くなれバ身れうちにてきえたてば終に二便のひがらひ出来ぬ
そまよりほどなく男女乃形わの所是をもぢおもひてきに毛
れ我もて身をれほひ為るこれぞ衣彼れもじめなれかくをとこ
をんなりすがたはおまぬれどなを嬰児れやうにて所ゆまを所が
其中に己がどちく志さしみ副所心よりて脛躁の毛乃はじ免てこと
れ所ぐもひして夫婦の所じもりをなしぬ世れ人是我いこきらひ
恥なし様らはしといひて石にぶてをおこれ男いたうもぢて地
に婦してうご紀ひこれを波底くといふ（波底ハ墮落れ義にてこゝに夫と云）其時にかれ

女くひものを持ちて阿るふこれを婆利耶ここゆくよぶ婆利耶は合乃梵語なりこゝに
婦といふはじめて夫婦の名はぢまれる世に世類多くなるまぬまゝがみな
石鉄うたゐく事をうまへいわゆを殺びてすめり是家居のもじ
免なる里志乃ときまでは寒暑もわれば雨風露霜れうまへも
なりしをかう家居出来ぬまは寒暑自然にそなり里悪風暴
雨も多く起こる里はて家居も多くなりぬまゝが隣どもの阿
ひ志こゝみ朝夕打ゆまりて香稲をとゐことになりぬ事はまで
八人化生にて阿里しがはじめて胎生れもの出来ぬ化生乃時は世
界も清浄に阿りゆゐを胎生になる里ぬまゝが身に血うみあ里
死すれバ人は里たゞまうじたりゆてうご免く人これれうにゐしさ

巻一之四

に其家をすてゝ分にいでゝ房室を殺ぶもと乃処そこな虫の
生所となりぬ是世界に不浄悪虫れいできたゐはじめなりそ
乃うちに死ぬ親人も多くなる里ゆきバ家をゆく里すふること
も心にまりせがたく志のだ色を林間野分などへもちゆきゐる
そほ里うゞ免あゐは焼又多にならしなどせし是葬儀のもじ
免なりこゝく家居はぢまる里人も胎生になる里ぬまゝが父子兄弟等
孔くらゐ定まゐこれら里むすし此発法今の法となる里て女を免
とゐ乃儀式もはぢまり日ごとに稲をとゐ事もへしきなしひ
なるにゐ日毎ふりそれどみなぬまゝ出て稲をとるさゐ中
に起とりそふそいで侍らはといふいなまばいでなればやとこゝに

きたるのみならず雲社多(いろいろ)名を僧(そう)侶(りょ)に依頼(たのみ)なきをいふ時の人この事を智恵(ちえ)ありかうたくさん松竹(しょうちく)バヤ免(ゆる)ふぬるのうま〳〵家(いえ)として年(とし)を日(ひ)ふる日(ひ)数(かず)六日七日(なのか)そこをもたくもふやうにあるまぬ世乃人(よのひと)をのを多くさへわくやうになるまれバ番稲(ばんとう)をわれる終(おわ)ふそふくび生出(いでなし)なり男それる里種(さとだね)をうる芸成長(げいせいちょう)し熟(じゅく)すをまもちてこひものとて其中に懈惰(けだ)なれなるまてみのうるうる芸ぞてんとうをこまるとまゝ業(ぎょう)はずめ人をゆるしそれど次男(じなん)にくをん多くなりやまぶこともたびこの法(ほう)あまバ財乃人(ざいのひと)はず免(ゆる)て瞋恚(しんい)をおこし抜立(そびえたて)てくては労(つか)すをもそれに楽(らく)すをもは却(かえ)ねまぶ古地(ふるち)を

まのみならといひてわもぬはずめてみびのくれ田地のうぎめ安(やす)まぬまば懈惰(けだ)のくをみびのうちうくをもひまうくれバ釈(しゃく)旋(せん)をむりまずく潘家(はんか)を和(やわら)して間(あいだ)のそをこをおく世(よ)中安(なかやす)悪(あく)にをおくれう〳〵すぎてゆく其後(そのご)私人(わたくしびと)あまてみびから井田(せいでん)をうる芸にうて人乃田地にうる芸おきくをぬすみもふ芸ぬすまれはずめ免(ゆる)なめ乃田めう〳〵抜立(そびえたて)ていうまをば他(た)乃をとをでとてうらをまてぬすめる者(もの)を折(おり)いるれバ薩埵(さった)をうめでといひて抜立(そびえたて)又薩埵(さった)の人(ひと)せものをとををれのはと多(おお)だふをうくそこは人あめまる事(こと)を来(きた)て芸(げい)をきけども理(ことわり)をわもちまうくは其時(そのとき)の形(かたち)も智恵(ちえ)を世にすぐれた法人(ほうにん)をわそのとき

国立国会図書館　タイトル『三世の光』 請求記号 182.85-Ko518m
ガラス使用

人乃もとに行きて理非を判断しまへとこふ彼人なきゝうに理非
を判じた事へはみなそれことわゆふくして昔にあたる和合
しむけびつてゐるし菅は其後ハあらそひなれば彼智恵すぐれる
人に判断をこひて是を治むこれもてかしこ事れこゝ数多
な里ぬ事はあ乃智恵人このく人ごとにかゞげらひてつ子れ能業に
れたる里みづかられいと事なきを悲ひて今は人乃ならそひもさき
あじ也いふ諸人(夫あらそひを吟なれば國士を法師らじ法らば
れれく田地六分れ一のいねを事あべしならそひを判じまへとこふけ
親乃事に是我ゆるしられは世れ人みな民のぬしとしなふぎるふ
とむ是光音天れ苗裔な里劫初らゆけこもりて家に能礼能

義なく相がうも智恵仁徳も世れ中にこもちならぬ為きく人しな
られバ法ひに帝位に法ざまらせまふ天れ下の青人菓ともにこち
なびきて相なじ心にたてしによりて大同意王とかし又平等に人
民を事もやしなひまふによりて三摩達多王と称し事なり三摩達多は梵語にてこゝに平等王と云
又國土れぬしなるによりて刹帝利と也なふ刹帝利ハ梵語にてこゝに田土王といふ
これ天竺四姓れ中の刹帝利乃はじ先なり此大王御命にあべ志ら
まぬだらりながらおはし事世を志ひし先は此閻浮提天れ下にこ
ばたひ始く家に病なく多きもいやしきもみな十善にかなひ民
をめぐこやしなりせまふこと親れ子をはぐくむがことし民の志らひを
法法まは子れ父母を思ふにかならば国ゆらうに民多れしみて世に

すめることといふもの久しき年月ありて又其ころ静なる
ことをねがふ人あまた聚落をいとひ山にいりて道を修
し時の人これを貴みて婆羅門とよぶ（婆羅門は梵語之こに浄行といふ）この人
も多くありしが其中に二度聚落に帰りて五欲に志ざし男
女のまじはりをなせし人あり其子孫を婆羅門種姓とよぶこの
種姓の人こそ文をまなび道を修することを事とし（此文のもじは天地ひらけし後梵天王あまくだりまして十四音の梵文を伝へさせ給ふこれぼんもんは梵王の作り給ふなれバ劫初より伝はり諸仏も是をもちてこれを説給ふとぞ）又きぬ
を好楽にくらし人好楽をうるものにかへて財宝をたくはふるを
なりはひとする人を毘舎とよぶ（毘舎は梵語にてこゝに座といふあきんどの姓なり）一切農人を首陀羅と
よぶ（首陀羅ハ梵語なりこゝに清浄といふ）此時四姓そなはりぬ人の心もさまざまにてあらそひも

多くなりゆきければおほやけも輔佐なくしてはまつりごとたゞひ
がたければひろくに智恵ある人をえらび國のたすけとせられたまふ
大臣百官乃はじめなりこれよりやうやく位階官職などをもさ
だめらるゝ事となりぬ大同意王のこれをつがせたまひぬれバ意楽太子御
位につかせたまふ次に善徳王次に最勝王次に長浄王次に頂生王
御すゑうち続き浄らかなるをたもたせ給ふ人民智恵次第にまさり
おのおの一芸をならふやうになりて是より伶舞管絃などのはじめ
なり世の中下りて人やうやく悪おほくなりぬれど寿命もみじかう
なりて十万歳ばかりぞいますかりし其後端厳王など数万代つゞく
転輪王にて十善をもて世ををさめさせ給ふ其後此王を龍護王

とかし其次を吉祖王と称ひ此ころは人壽二万歳ゆときなり
迦葉如来世にいでたせなひ宿生を涙度をさせなふ釋尊ハ其
時菩薩ゆ三大阿僧祇劫乃御行程をみてなひ迦葉佛に成
佛ゆ記別をうをさせなふそれより埤率天乃内院にまじり乃天
ゆたゆに御法を説をなひ此世界人の根機ゆ熟すなをまち
おはしまひ是より阿まりぎ御代ながうなりて悪念王
ゆかし生家阿里耶師ゆをしをうけたせなひて牛をころし
天祇御四里なふこれより人乃壽命万歳にすきほとぞそれより
後に賢念王とかほおはしまをしが人ゆ身のなやふそれバとて
鎧をたくてせなふ其のちは五千歳にすぐ御壽命なりけり又其後

に時ゆ太子五人の人をころしなふ事なりそれより壽命ならに
ふみじかうなりて千歳にはすぎばつまりそまとより世く傳を
ま殺ひ後ゆ王を軍勝王とかしなほ此時后四処おはしまひなく
皇子一所をうみまゐらせなふ一乃宮を炬面王子とかし二ゆ宮
を大耳王子三ゆ宮を象行王子四宮を宝釧王子とかしなる
其四所の后ほどもおくみなかれたをなふ大王乃御なげきを
とかくならばまゐり事をもおこたらせなふやうなれば羣臣これ
をかなしみ大臣たちなりてはらに后をまてさせなへと奏
をうけまどみこたちゆ御としをもじおはしまをばとてみのどう
けをおたまはる大臣たち君うまへにしげませなひては國家乃

まいりてことを私(わたくし)に伝(つた)えればふたゝび后を入(いれ)させ給(たま)ひ法(のり)を
ゞ供(とも)養(やう)せんとて三夜(みよ)すゝめきこえ給(たま)ふ大王も法(のり)
とてやう〳〵ゆるし給(たま)ひそれより勅(ちよく)をうけて五天竺(てんぢく)もと
むかに隣国(りんごく)の王(わう)ゟ女(ひめ)みこおくり給(たま)ひて
先(さき)の后(きさき)をもおひ給(たま)ひやがて后(きさき)
せのふたり羣臣(ぐんしん)これをいまだしとはゝ給(たま)ふ乃(すなわち)父王(ちゝおう)ゟ
女(ひめ)をまねらせをくり給(たま)ひたてまつり春宮(とうぐう)にたてさせ
給(たま)ふ羣臣(ぐんしん)大王(だいわう)へこれを奏(そう)
せ給(たま)ふに大王(だいわう)ふたり長(ちやう)じ給(たま)ふみこ四所(よところ)までおはし
ますをおきて今(いま)ゟ後(のち)は春宮(とうぐう)にたゝせ給(たま)ふべきまをわせ給(たま)ひ

まいらせ給(たま)ひ彼(かれ)は生(しやう)のふぼ也(なり)とみ給(たま)ふ此時(このとき)群臣(ぐんしん)又いさめきこえてまいり
ひ(このび)後(のち)を後(のち)の后(きさき)に立(たて)させ給(たま)ひながきぼせにふかくこの
后(きさき)にみこ乃(すなわち)おはしまさねやもおはしまさねやもあれ侍(はべ)ればみこ男(をとこ)みこ女(をんな)
みこをはうじ〳〵侍(はべ)れそ其時(そのとき)に子(こ)ぞみて事(こと)をはうじ給(たま)ひ侍(はべ)るべし
まの后(きさき)を立(たて)させ給(たま)ふべしと奏(そう)きこえ給(たま)ふ大王(だいわう)これいさめをいまだ
ものをおもひ給(たま)ふにやそれより春宮(とうぐう)にたてまつり給(たま)ふ
き日(ひ)してう女王(ひめみこ)をもうけ給(たま)ふ後(のち)后(きさき)になし給(たま)ひ
ぬ侍(はべ)りけれ后(きさき)をうれしとおぼしめしたる
ほどおそろしきまでなりぬるなり男(をとこ)みこ一人(ひとり)うみま
らせ給(たま)ふ形(かたち)ちせ給(たま)ふより愛楽(あいぎやう)王子(わうじ)と

国立国会図書館　タイトル『三世の光』 請求記号 182.85-Ko518m
ガラス使用

やしき事は其後春宮の御はらさおはしまは時大王は炬面王子をたて
なさんとのたまふ群臣ハ一天萬国のぬし一度勅定なりしことはたがへなふ
御しられバ愛楽王子をたてなふべしと奏をしらるこれかみをすてく
才はたのまじきことなりて知らしめられバ群臣又いそくしたりかみにて
おはしまはともよかるぬことおはしまはしたすてさをなふやと奏せら
ふ大王えらり家國ハとゞかなきもれを志ゆるでをすのふこと
なし此ゆゑなれハゆゑしどくむべからはとれたまふそれより群臣よき便
事をわて彼四処のみこたちを志りぞをしらるでをしらせんとおもひそ乃
をつまをはかるこきたらぬのすゝめやうひのはじめのうなるべし御
室の花も盛をうなりぬまはかり群臣ともにたうらはてなる一処

巻一之十

の御室をかぢり志りしはて大王行幸の処とはぐめ御目とあるべく七
宝のお御しをはじ然何ごともたらえぬことなく御うけおき林
の鳥も夢のどかに日かぎをそうらゝかなる御日をふみゆきせはをなふ
やうにとたり大王へ奏しをらぬはきこまげ四王子にこそのく
花今はかりに見え侍ましバおはし御して御読ぜよとのぎをまれ
みこたちよ給こぞせなはておはしまして舞楽をなし御あそびなり
これ興にいらせなふを見ゆるらをて大王乃御家にまゐり御そ
のく花をふを盛と見え侍り荘厳もとくれば侍まば行幸せ
はをなふべしと奏はこれにもよほされて皇后とくもに玉の御
車にて彼御室に行幸なり御園ちううなりて管絃のこゑのき

こゆまバ何ぞの愛孫をなすぞとこそせまふ群臣四王子は御心の
御にみなそびあはなる里と奏に大王いと笑たういかゝせたまは
御園へそいらをなそぼ御車をこゝろしまはしきなしげにて
深宮に入せまふやがて群臣をめされ乃四王子をいかゞ罷すべきや
とこそせまふにかねてたゝりし事なまばみなことぞをそろへ
此四王子を擯棄せ出をなそでは御國のまゝ里ごと亂まに侍
らんと奏に是によりて宣旨なりて殺に四王子を擯出せさ
をなふそのゝち与紀日して愛楽王子春宮にたゝせまふ四処の王
子はおぼしもうをぼみやこをいで出せまひ北を出しておりまに
群臣はたゝゆまゐらせてかうなゝせまふ事を世は人なゞきかなしひ

本御ことなれぬなゝぼ御伝にとてともに郡を出しこひ本
郡人もすくなゝかゝず雪山はふかと恒河はかゝたらにおはし
御しゆきぬまば志たゞへ不知とぐちがやをとめ家をゆゑゆて才
ませ本り木こ里すなどを志て世をすごしまるに人志ぶひな
何ゆまゆ里ほどもなう國城とぞなりそ此処にえより劫比
羅仙人とゆふ仙なりそ里みこたち日ことにおはし御して道
をとそせまふこ乃仙人聖うく人民多くなりて静かゝ祢ば
志ゆりなる処をもとめて出るべしとなゆまそれバみこゝち仙人
ハ那ぶくこゝにすみまへ御三げからほかにうゆ里なそんと孔こまふ
はゝば御為に福徳は郡の地をもとめ侍ふなゞしとなゆ里て中天竺の

うちに猿地をえらびてまゐらせ雅ふ四王子是にうけらを
ゐふ此都も此のえ人民ゆめぐみになつきゆさりにやすくすめ
ゆゑ劫比羅仙人乃定められ法都ハ劫毘羅城といふ劫毘羅ハ梵語也
こゝに黄色といふ舊譯には迦維羅衛也といふ此劫毘羅城も又住人多くなつゝゆきバ家
居れきを那らべ作りいぐをつまれ家地なうなつゝゆゑ其間天神
つらされたまひ王子乃ために福徳社地を定むべしとて雪山社
ふもとに都社地を志免さふ此処にうれらをゐひ民をわらさく
をしめさをゐふ天神社志められしみやこ那れハ天示城といふ
此都も又ゆえにぎたふ軍勝大王こ社御阿ゆゑさ海をゆらへきこの勢
ゐひいたうらゐこばしてわが子大釈迦と社まへ雅釈迦ハ梵語也そこに能といひ又勇猛と云

此時より釈迦氏ハ号ゆゑまりゐ是によりて今ハ世尊をも釈迦
如来とゆしし事法な聚えより過去世にも釈迦如来とゆ御ほとけおりしまはその
時今の世尊ハ仏ま位におりしまし我切法蔵をは此佛のごとく
ゐらんと云願をさせゐりとあり既世乃孫ハ其後軍勝大王崩じゐひしかば
軍勝大王の御ことはよりおこれ雅
愛楽太子御位にゆせゐふ此大王御命みじかうおはし御しみこゝ
おりしまはで崩じゐへば群臣炬面王子をこゝしまゐらせて御位
にゆをゆ事法にて社ち炬面大王御おとうとのみこたちをはじめ群臣
をも知し集めてのさまふやう家等羅なりして都をいでしは後の后
我立られしによまり今より後家家には第二乃后をたゆ産から
ぼと勅しおきて殺へ雅此大王をみこおりし御さで崩じゐふ第二
ハ大耳王子第三の象切王子ゆぎゝ御位にゐさせゐふみなこゝ

おりし間さて罷したまへ事を終に第四孔宝釗王子御位にいりせた
まひ是に太子おはし間は御位にいりせなひて近宝釗王とかし
其師子を天門大王とか此帝むかしを志ことせなひて劫毘羅城
へうつらせなひ御世を志るし然はこれより天示城ハ親王たちのおはし
ます処となりぬそれらせなこがうのたもらせなひて後孔王を堅
弓王なりし事ほをのこみこ二所おはしまは御このみを師子頬王
子とかし第二を師子吼王子とかは師子頬王子御位にいらせ
なひて天地下を志るし然は御勇力世に間ならせなひ弓をひか
せなふこと五天竺にならびなき事ほ人なりけるとなん此大王ハ釈尊の御祖父にて御はしまは
此時天示城孔王を善悟王なりは其妃を妙勝夫人とかは

此善悟王と師子頬王とハなとひとの御すぢなれどわかまさせなひてより年
代なごく里ぬれば志るしうもおはし間は善悟王これをなぎ
ことをなひよきをめみこおはし間して后にたらせなふやうにと法事
にいれり形ひなふ劫毘羅城には師子頬大王おぼしなるにいし
へは輪王お孫きなひしを世もす漢になりぬまてを多へて輪王も
出なれば王位おとろへ始めまいりて聖王子乃おりまして輪王の
御位にもおぼりなれんことをとて天神地祇にいはりかはせなへ里
世等下生乃ときいたらせなへバ師子頬大王善悟王のこゝろみこゝろ乃
おこらせなふ縁起不可思議なりけり里此大王にみこ四所おりまは第
一を浄飯王子第二を白飯王子第三を斛飯王子第四を甘露飯

王子とかしなほ又女みこ四処おはし御ほ才一を清浄とかし才二を
純白才三を純解才四を甘露とかしなほ御ほどに天示城
にはなどなう妙勝夫人女みこをうミまゐらせなふ御このうちにてうう
いくしうおりし御しみなほ人これおどろきにふぎなり梵天な
ど乃あまくだりうまれ御せなふならんこれ世乃御ありし御とは見えん
御せなれほなどかしなほ是によりて三七日の後大臣たち御名を
定め御せなふとき摩訶波闍波提となりしをなほ摩訶波闍波提は梵語にてこゝに大生主
とゝふ梵天のことゝとぞ王宮にみこうまれ御せなへばもりせを見てうらなほ勢
ら御に定めなりられて世度も相師をめし此女みこの御相をとらせ
なふにて乃みこは福徳のみこにておはしまほ輪王のきさきをたんじやう

せ御勢なふ御しと相しなほ善悟王いとゝなたうちなりこだせたかは
御心をいくしていつくしみかしいきなふ妙勝夫人ほどもなくうち
いぐきて女みこをうミまゐらせなふ何ごとも御何子其摩訶波闍波
提に御さうをなへば御のまやと名いをなほ摩訶摩耶とハ梵語にてこゝに大祝といふ御御
このうちめ都ふこれにてにおりし御し人乃御さ御とは見えし御せなれ
ほ諸天の中より志ざしく現化を御せなふにやとて此御名をつけなほ
アとなほとなん例れ相師を見しうらなりせらまして御福徳あ子
みこに御御らせなひ金輪聖王をうみなほらせなふ御しと相しなほ
ふ大王むりしより里の御邪を今ミてなれんとおぼしむりて御よりこ
ひにたへなれほ御心ことにうしいきやしなひなほらせなふことかほこそ

なのゝ如く此事世に至るゝ程こゝ迄ハ五天竺の人々しゝう輪王の
たえていでたせのまゝ也をひじ里此御世にこの事しせのふべきなり
今日とこのふぎとのあこびなほことかぎり如し劫毘羅城にハ淨
飯王子やうく花となびさせのひ春宮にこゝせのふ大王天示城に輪王此御
母となる也のふ爲きひめこゝやおはしまほ事をきかせのひ御心乃
うちに御祿がひ此御にに聖王の出たせのふ爲きなりと志るし
然しいとうれしきことにおぼさまし相師乃金輪王をうみのふべしと
奏し今御御いかうとぎみをむかへのひ春宮孔妃にたゞ免たせのひ
五百孔婇女御御のこゝろ也までも世にすぐれたほをえらせたまひ
てよき日してむかへたせのふ給ふこゝにも御本意かなひのひめでたき

御所の御御と也なり里御安はぎみも大王相かおぼほやうおはし御ほ
よしを孔こゝにおくらせのふそろこゝ邊國此山の間に般茶婆といふ処
阿里此処孔民むほんしてそれほとのの人民をかんぶ御敵せいだろ乃
ために官軍をむかへたせのへどそかゝ勢のようして数度敗軍して
この爲りぬこれにより大王太子に勅しのひ四兵おごそかにして乃地に
むかはせのふ般茶婆には太子此みのりに出たせのふときゝみるおどろ
き恐れてすこやかに降里彼國安らかに治里ぬたれバ官軍やいだま
血ぬらすして敵を出さゞへ却にかへらせのふ大王これをきこしめしてハ
ちろこだせのふことといかでおろかにおりし御さん何ごとをもて賞しま
ゐらせのえんやとおぼしまの群臣を免し般茶婆治れるハ太子此大

切なり何をもて賞すべきやとおほせたまふにひとりの大臣御位を今
くおはしませどまだをさなきもなし王の御ことはかくに先で
たく先づらせ給ひしたてゝまゐらせたまへと奏せしに大王太子の位には
王の御この御功を賞するには臣の位やと仰せたまふに文武百の大臣ほう
ろくをまゐらせたまふべしと奏せしかば大王普天率土はみな春宮の御
かぎり御処なれば何にかはろくをまゐらすべきとのたまふに群臣こと
ごとくて臣下の功を賞するには群臣のはじめ先給ふべきなり春宮
の功を賞し給はせたまひて大王みことのりをくだしたまはし
と奏けれ大王これを聞しめし普天率土のめしとなりたまふべき春
宮なればほうろくの給はせたまふべきことなしと太子申しおはし給せば

御位をうけ給はらんとおはしましけることびの賞には二処の妃を立させたまふべき
し宣勅したまふところ此大臣はおつしますべき事なりとりしこまり
うけたまはりいそぎ天示城へ勅使を立られ又五百の婇女を元庭
び御むかひにおくりを給ひ摩訶波闍波提をむかへさせたまひて第二
の妃に立させたまふ其後大王崩じたまひぬれば浄飯太子御位を
つぎたまふ摩耶夫人と摩訶波闍波提夫人と東をへだてゝとなる
し給ふあたゝみにむつびはしたまひて御孫ごみをかたらひあり
おはしまけり先つ栄のめでたきことのうちなりそれ下をおさめ
やかに人民治まりて御世を治めぎて万はみなくつまとぞ（已上若者歌経のいふなれをと）
きくなへるなり目連尊者此賢劫は先より今までの事をこくまれ給へり

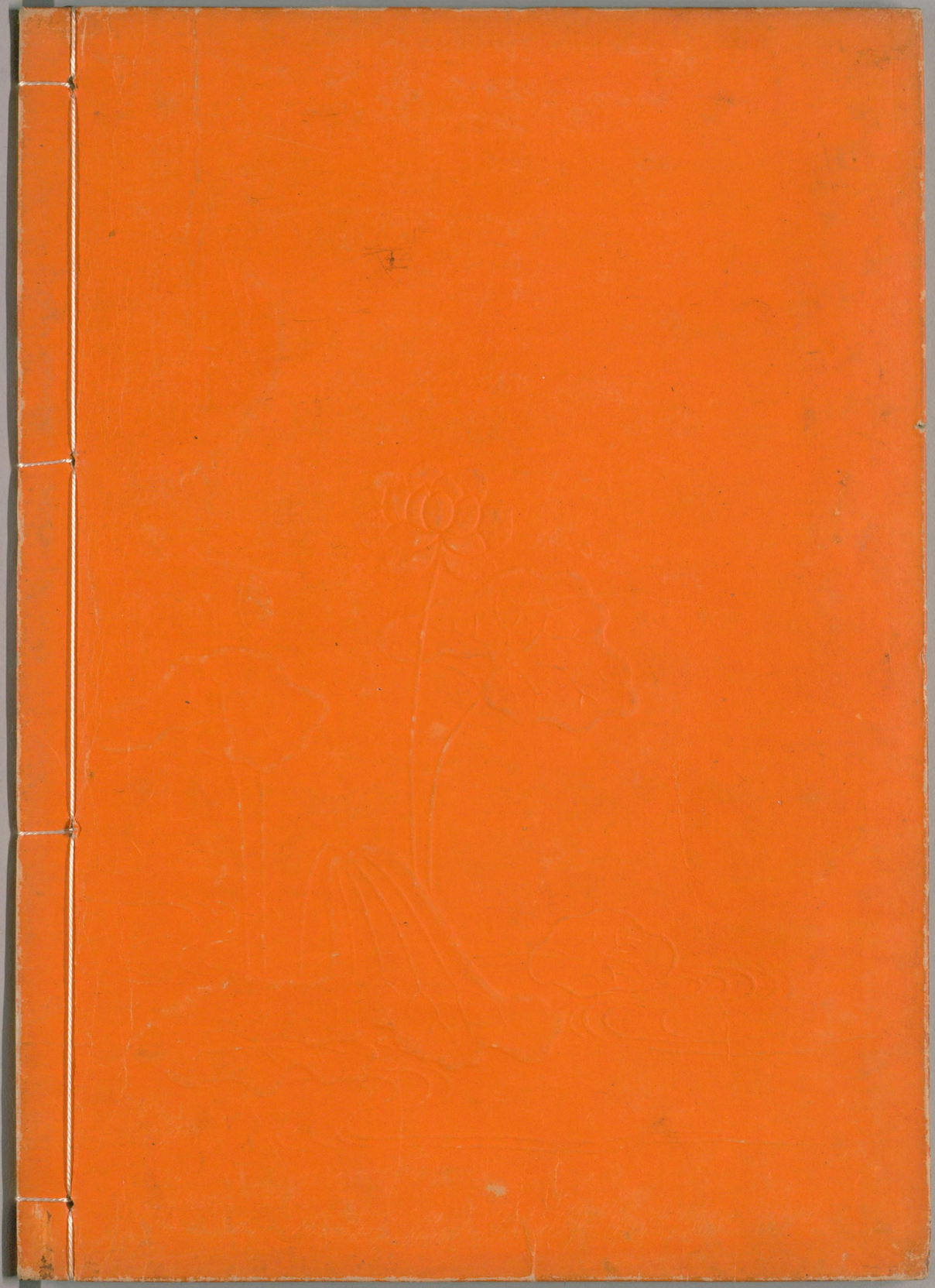
国立国会図書館　タイトル『三世の光』　請求記号 182.85-Ko518m
ガラス使用

みしことはやうにとかせなひなほ時にあらされる事どもいとこゝろやうに
もおほしらかにも説をはりて座よりも下里一面に坐し跪然として
おわしまほ世尊これ紙志ろしめし起出ませなひ御座にゆかせなひ
て大目連をほめたまへるふるまひなく大尻はなれ家釈迦種なり
よりまろことをこゝろやうにめ法に説をそれたまへしへ御りてこの
説はまゝに此釈迦種族をとこんそれ善男子善女人長夜は中に大
に利益をはつきに安樂をうきんもろく此大尻比丘比丘尼ぬ法り
憶念し他の為に聞ひく説べし此人利義をべし法義をべし梵行
をべし大いなり利益をうきがゆゑにみなまはに更持し讀誦し
他はために説なしとゆゑをそこをなふ劫毘羅城中のもろく

此釈種等此本族をとこのせなふをきくなひみないとはたうよる語
しひたまひ御足を礼してみれば処にあるを聚たまふ

国立国会図書館　タイトル『三世の光』 請求記号 182.85-Ko518m

ガラス使用



国立国会図書館　　タイトル『三世の光』 請求記号 182.85-Ko518m

ガラス使用